

話 題

ビーム物理研究会・若手の会

原田 寛之^{*1}・坂上 和之^{*2, †}

Young Researchers Association of the Japan Beam Physics Club

Hiroyuki HARADA^{*1} and Kazuyuki SAKAUE^{*2, †}

Abstract

Young Researchers Association of the Japan Beam Physics Club was established in March 2018. We will report a detail history and trigger of the establishment of our association, followed by the explanations of ourselves, which are the structure of our organization, members, activities and purposes. Lastly, we will discuss our future vision of Young Researchers Association of the Japan Beam Physics Club.

1. はじめに

「粒子加速器」, 「放射光源」, 「レーザー光源」などで生成される様々な「ビーム」は, 物理学, 医学, 薬学, 工学の学術的研究に加えて, エネルギー科学, 産業利用等の幅広い分野の研究基盤として利用され, 科学技術へ大きく貢献し発展し続けている。

その研究基盤である「ビーム」を支えるものが基礎研究の『ビーム物理』であり, 粒子加速器ビーム力学, レーザービーム光学, ビーム・ビーム相互作用, ビーム・プラズマ相互作用, ビーム・レーザー相互作用, 非中性ビーム, 光子ビーム, イオントラップ等の幅広い概念を含み, それに関わる装置(粒子源, 電磁石, 電源, 高周波加速空洞, 真空機器, モニタ, 検出器, 光源, 光学素子)の開発に大きく依存し発展するものである。この『ビーム物理』は, 先人の研究者たちが長年にわたり基盤を築き上げ, 「ビーム物理研究会」として活動してきた。この研究基盤の中で, 若手研究者・技術者らが連携・共有し, 共に切磋琢磨することが次世代のビーム物理の発展, 更に

は科学技術への貢献を担うと確信し, 『ビーム物理研究会・若手の会』を結成した。ビーム物理研究会は, 日本加速器学会の結成時の母体の一つであるため, その会員は日本加速器学会にも多く所属しており, 非常に関連が深い。つまり, 若手の会も同様である。

本稿では, 次世代を担う若手研究者, 技術者, 大学院生・学生で組織された, この『ビーム物理研究会・若手の会』を日本加速器学会への「話題」として提供すべく, 組織の設立経緯や組織化への流れ, 組織・会員の状況, 活動状況を報告する。

2. 組織化への道

2.1 組織化前の活動

毎年開催されているビーム物理研究会ではビーム物理関連の講座を持っている大学や研究機関を中心に関係者が集まり, ビーム物理に関連する進捗や今後の方向性に関して議論を行っている。特に議論に重きを置くために1講演あたり質疑を含めて1時間弱を取るスタイルでこれまで運営がなされてきた。非常に良い体制である反面, 若手(特に学生)の参加に対して障壁が高かったこ

^{*1} 日本原子力研究開発機構 Japan Atomic Energy Agency

^{*2} 早稲田大学 Waseda University

[†] 2018年9月より所属変更 東京大学 University of Tokyo (E-mail: ksakaue@psc.t.u-tokyo.ac.jp)

(Hiroyuki Harada E-mail: hharada@post.j-parc.jp)

(Kazuyuki Sakaue E-mail: kazuyuki.sakaue@aoni.waseda.jp)



図1 第1回ビーム物理研究会・若手の会の集合写真(上)と夕食の様子(下).

表1 ビーム物理研究会・若手の会の開催.

年度	開催地	主催
2011年度	宮城県仙台市	東北大
2012年度	広島県廿日市市	広島大
2013年度	沖縄県恩納村	OIST
2014年度	京都府宮津市	京大
2015年度	茨城県東海村	東大, JAEA
2016年度	兵庫県たつの市	JASRI
2017年度	愛知県岡崎市	分子研, 名大
2018年度	千葉県千葉市	QST (予定)

ともあり, ポスターセッションを設けるなどの施策が試みられていた. このような背景の下, 若手内においてより緊密な関係を築いていく, 及び若手の参加を奨励するためにビーム物理研究会に若手の会(研究会のみを指す)を併設する試みが有志によって行われた. 第1回は2011年に東北大学主催の下, 作並温泉にて開催(図1上: 集合写真)され, 以降毎年ビーム物理研究会に併設する形で開催している(表1).

開催形態としては, ビーム物理研究会本会が2

日目に終了後, 夕刻から次の日までを若手の会とし, 宿泊もできるだけ同じ宿舎にしている(図1下: 夕食の様子). 食事はもちろん, 宿泊する部屋も他の大学・研究機関のメンバーと同室とすることで, 非常に強い横の繋がりを作ることに成功している. この若手の会で培った繋がりを日本加速器学会年会や他の研究会においても継続することで, 良い関係を作ることに至っており, 今年度以降も引き続き若手の会を開催する予定である. 本稿が掲載される頃には直前となっているが, 今年度はQST主催の下, 千葉県幕張で11月21日~22日の期間の開催を予定している. 興味を持った方はぜひご参加いただきたい.

研究会の内容は, 概ね主催者の意向によるがこれまでに行われてきた試みとして, ビーム物理のより深い理解のための専門家による講義, 企業と若手(特に学生)を繋ぐための企業技術者による講演, ビーム物理の広がりへの理解に向けた関連する他分野の専門家による講演, 研究意欲向上及び研究業績のための若手口頭発表セッションや若手発表賞の設置(2017年度については4.4節でも述べる)等, 非常にユニークかつ魅力的な試みが行われてきた. 今後もこれまでにない試みが行われ, 魅力的な研究会となることを期待している.

2.2 きっかけ—若手科学者ネットワーク登録—

さて, 2016年夏, 日本学術会議事務局より日本加速器学会事務局宛に「若手科学者ネットワークへの参加登録について」のメールが届き, ビーム物理研究会事務局にも転送されてきた. まず日本学術会議は, 我が国の科学者の意見を纏め, 国内外に発信する日本の代表組織である. そして, 若手研究者の発想を社会の諸課題の解決に活かし, 将来の学術界を担う若手研究者を育成するため, 日本学術会議は23期より常設組織として若手アカデミーを設立した. そのアカデミー内で, 日本国内の多様な分野で活躍する若手研究者を繋ぐべく, 若手科学者ネットワーク分科会¹⁾が設立された. 主な活動内容は, ①メーリングリストを通じての情報交換と政策提言に係る意見収集, ②若手科学者サミットの開催, ③アニュアルレポートの作成である. 転送されてきたメールには, このネットワークに若手の会の名称, 代表者氏名・所属機関, メールアドレスを登録してほしい, そして活発な意見交換の下, 「未来に責任ある世代」

として建設的な議論をしたいという趣旨が書かれてあった。2.1節で述べたように、ビーム物理研究会は、年1回開催される研究会で若手の会という交流の場を持っていたが、組織的な体裁は整っていなかった。一方、ビーム物理研究会は日本物理学会のビーム物理領域の事務局も兼ねており、若手2名を領域運営委員(1年任期)として割り当てていた。当初はその2名を登録する案を進めていたが、「毎年代表が交代しては、ただ参加しただけになり、労力の割にプラスにはならない」、「しっかりと組織にするべき」、「組織化して登録するほどのことではない」、「きっかけは今回の登録ではあるが、組織化自体は若手の活性化に繋がる」、「組織化に賛同してもらえるのか」という様々な意見が出た。そこで、組織化を検討し、研究会に提案することとした。原案は、後の第1期幹事会のメンバーが中心となって作成した。

2.3 組織化の提案・承認・設立

2017年3月の日本物理学会第72回年次大会の会期中に開催したビーム物理研究会総会にて、『ビーム物理研究会・若手の会』の組織化を提案した。全議題の内、この議題に多くの時間を費やし議論がなされた。議論の詳細は、ビーム物理研究会の2017年春の総会議事録^{1),2)}を参照していただきたいが、一部を抜粋して以下に紹介する。

- ✓日本学術会議の分科会のアニュアルレポートはどのようなものか。
- ✓45歳以下という年齢制限を設ける意味はどのようなものか。
- ✓入会への制限、指導教官による退会可能な仕組みの構築に関する意見。
- ✓若手科学者や学生の立場・意見は非常に重要で、日本学術会議・若手科学者ネットワークでの活動は大事。
- ✓若手科学者ネットワークへの登録の承認。
- ✓どんどん若手や学生がやる気になる取り組みとして賛成。すぐに立ち上げるべき。
- ✓若手の自主性を高めるためにも、組織化後は若手の会だけである程度自由に決定できる仕組みにすべきだ。
- ✓更に深化させ、次回会合で承認を目指す。

上記のように年長者と若手の双方において、活発な議論の中で好意的な意見を多くいただいた。これは提案者としては予想以上の反響であった。会合中または会合後にいただいた多くの方の意見を取り入れ、同年8月の日本加速器学会第14回年次の会期中に開催したビーム物理研究会世話人会にて、組織化が承認され、会合後「組織化委員会」(11名)を立ち上げた。その委員会にて、「幹事会の設立」、「メーリングリストの作成」、「会則の作成」、「ホームページの作成」を進め、2018年3月の日本物理学会第73回年次大会の会期中に開催したビーム物理研究会総会での設立承認を経て、提案から一年を掛け、ようやく『ビーム物理研究会・若手の会』が設立した。そして、同年5月より会員の入会申込を開始した。

3. ビーム物理研究会・若手の会の現状

3.1 第1期幹事会とホームページ

若手の会の設立に関与したメンバーに加え、組織運営や研究会との連携を考慮し、第1期幹事会を立ち上げた。以下が幹事会のメンバーである。メンバーの所属は設立当時の略称を記している。第1期幹事会(10名)

会長(全体統括):

原田寛之(原子力機構 J-PARC)

副会長(粒子ビーム担当):

坂上和之(早大理工学術院)

副会長(レーザービーム担当):

井上峻介(京大化研)

幹事(名簿担当): 菅 晃一(阪大産研)

幹事(情報集約担当):

近藤康太郎(QST 関西研)

広報(Web/研究会担当): 山本尚人(KEK)

広報(研究会担当): 今 亮(JASRI)

オブサーバ(ビーム物理領域運営委員):

全 炳俊(京大エネ研)

顧問(ビーム物理研究会会長/副会長):

羽島良一(QST 東海研)

鷲尾方一(早大先進理工学部)

ビーム物理における粒子ビームとレーザービームを専門とする双方の若手を配置し、日本物理学会・ビーム物理領域とビーム物理研究会との強い連携の下、運営できる体制とした。会費・年会費の徴収を行わないため、運営費はなく強い意志の

¹⁾ <http://beam-physics.kek.jp/ryoiki/kenkyukai/memo/memo2017S.pdf>

みで運営していくことになる。そのため、若手の会を代表して参加する会合には若手自ら旅費等を捻出しなければならない。また、設立の当事者として感じたこととして、若手自身が研究に邁進しつつ、成果を出し続けなければならない存在であるため、頭も身体も非常に忙しい中での活動であった。それには、各々の所属長の理解があったことが非常に大きかったと言える。また、組織の設立や運営の経験が乏しいのは言うまでもなく、我々の会も設立に向けビーム物理研究会から多くの助言を受けた。日本学術会議若手アカデミーの2014年の報告書に「若手の会の新規設立に当たっては、設立時及び設立後の業務における若手の会代表者の負担が大きいため、所属する学協会からの支援が重要である」と記載されていたが、その通りだと感じた。しかし、組織化の難しさを直接肌で感じながら進めた設立までの道のりは、なかなか経験できるものではなく、若手に限らず貴重な経験と言える。設立時の経験により、運営では幹事会メンバーの各々の役割を明確にし、相互補完しながら運営する体制や入会申込・管理システムの構築を目指した。

また、幹事会が中心となり、情報共有・情報発信のためのホームページを作成した¹²。ビーム物理研究会のホームページがあるKEKのサーバーにwikiベースの若手の会専用のホームページを立ち上げた。幹事であれば外部から編集が可能なものとし、一部の幹事のみ大きな負担が掛からないようwikiベースにした。それは、継続的な組織運営を可能にするためである。このホームページには、様々な情報を載せており、一度覗いていただければ幸いである。

3.2 目的・活動方針

ビーム物理研究会・若手の会ではその目的を会則第二条1で次のように定めている。

「本会は、ビーム物理研究会、その他の学会等と連携および交流を行いながら、ビーム物理研究に携わる若手自身の能力と意欲を高めると共に、若手を取りまく社会の諸問題の解決をはかる」

このように、関連する学協会団体や若手間の連携や交流だけにとどまらず、独自に持っている日本学術会議へのチャンネルを最大限に生かすこと

も目的として挙げている。

若手の定義に関しては様々な議論があったが、日本学術会議の定義と合わせ「45歳未満の若手科学者や大学院生・学生」とした。また、会費・年会費の徴収は行わないこととした。

上記の目的の達成に向け、以下の6項目を活動方針として掲げている。

1. 年一回の研究会の開催
2. ビーム物理研究会との密接な連携や意見提言
3. 関連する学協会・団体との連携
4. 日本学術会議若手科学者ネットワーク分科会への参加
5. 日本学術会議への意見提言に向けた意見集約
6. その他、本会の目的を達成するために必要な事項

この活動方針の下、実施してきた活動報告は4章で述べる。

3.3 入会申込と会員状況

2018年5月より会員の入会申込を開始した。入会申込は、ビーム物理研究会の方法とは異なる方式を採用した。主な違いは以下である。

1. 入会しやすくするために、推薦人をなくしメールのみで入会可能とした。
2. 年齢制限があるため、登録項目に生年月日を追加した。
3. 卒業・修了した大学院生・学生等の管理をすべく、登録項目に指導教官のメールアドレスを追加した。
4. 運営側の登録・管理の負担を軽減するために、入会様式をエクセル形式にした。運営側は登録情報をコピー・貼り付けで容易な登録・管理を可能とした。

入会申込時のメールには、若手の会発足への感謝や今後積極的に関与していきたいといった前向きな言葉が多くあった。今後の若手の会を率いる次の世代の若手が存在していることを実感している。

2018年7月31日時点の会員数は、81名となった。入会申込開始からの会員数の推移を図2に示す。2018年5月21日に研究会のメーリングリストで案内をした直後の10日間で70名近くまで増加し、その後も緩やかに増加している。個人情報

¹² <http://beam-physics.kek.jp/bpc/wakate/wakate/>

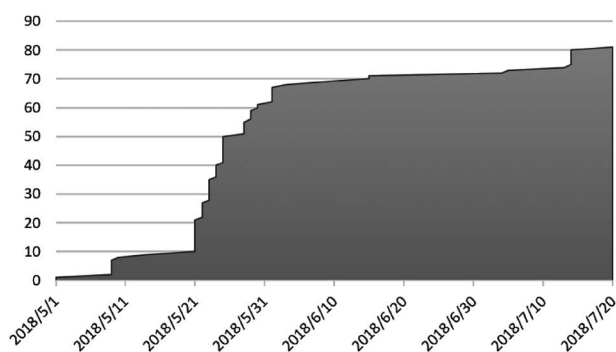


図2 会員数の推移.

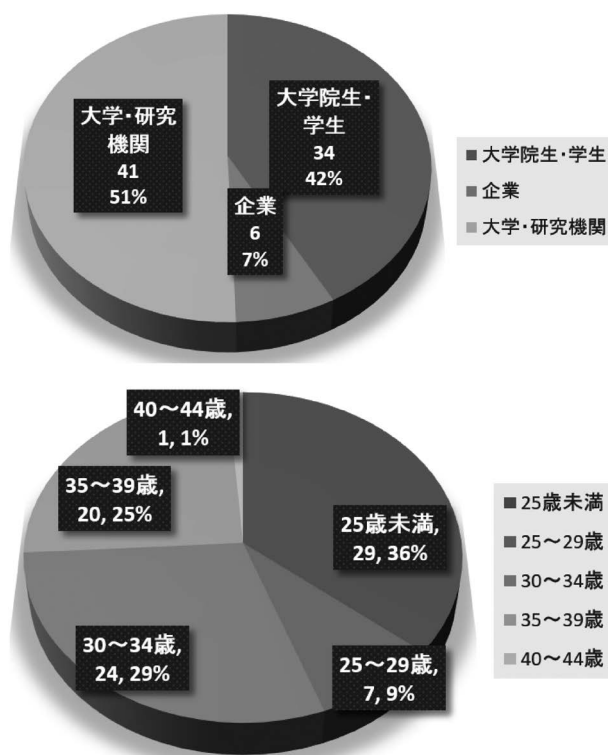


図3 会員の所属(上)と年齢内訳(下).

保護の観点から入会時に収集した情報の利用目的を明確にし、さらに同意のあった会員の氏名と所属は、会員リストとしてホームページで公開している。

会員の所属と年齢内訳を図3に示す。所属内訳をみると、大学・研究機関に所属する研究者・技術者と、大学院生・学生が大半を占めている。若手や大学院生と企業の方を結ぶ懸け橋の役割も担いたいと考えているため、今後企業の若手の方にも多くの入会をお願いしたい。そして、会員向けのメーリングリストを研究会の案内のみならず、企業等の公募や採用にも利用し、若手と採用側の双方に有益な場として活用していただきたい。次

に、年齢内訳をみると、25歳未満の学生会員の割合が一番多く、20代と30代で大半を占めていることが分かる。45歳未満の規定はあるが、入会可能なはずの40代が極端に少ない。その要因として直接聞いた印象では、自らを若手とっていないこと、数年で45歳に到達してしまうこと、そして安定した職制になっており危機感が少ないことが挙げられる。納得できる理由ではあるが40代の方にもぜひ入会していただき、数年だけでも屈強な年長者と貧弱な若手を繋ぐ役割を担っていただきたい。一方、政策提言に向けた意見集約において、若手研究者・技術者、大学院生、任期有無などの各々の立場の声を反映可能な会員数と年齢内訳となりつつある。本稿掲載後、多くの方の入会を期待しており、皆様には周辺の若手の方に本会への入会をぜひ促していただきたい。

4. 2017年度からの活動報告

活動報告はホームページにも載せているが、本章でも一部の活動報告を紹介する。

4.1 アニュアルレポートの提出

ビーム物理研究会・若手の会は、2017年3月日本学術会議の若手科学者ネットワーク分科会に正式登録された。2017年8月時点での登録団体は、229団体(著者調べ)である。若手の会として、2017年4月に「ビーム物理研究会・若手の会アニュアルレポート2016」、2018年4月に「ビーム物理研究会・若手の会アニュアルレポート2017」を提出した。どちらの原文も、ホームページに載せている。若手アカデミーのメンバーが交代したこともあり、2016年度版と2017年度版では様式や報告項目が変更されたが、2016年度版に関しては以下の8項目の回答が要求された。

1. 若手の会名称
2. 代表者氏名, 所属機関, 職位等
3. 構成メンバー, 人数
4. 関連ある学協会名称
5. 若手の会ミッション
6. 活動内容
7. 若手の会の課題
8. 若手科学者ネットワークに期待すること

2016年度版はすでに日本学術会議より「若手科学者ネットワークアニュアルレポート2016」³⁾が記録として報告され、その中で60団体のレポート

が紹介されている。ビーム物理研究会・若手の会は90ページ目に載っている。このレポートの最後の「おわりに」にも述べられているが、この分科会自体が新しく、本格的な運用もこれからという印象である。しかし、「若手研究者のネットワークは若手研究者問題における情報収集や問題提起を行う上で非常に重要だと認識」と述べており、発信力の向上や分野の発展に今後繋がっていくと信じ、アニュアルレポート以外のことでもビーム物理研究会・若手の会として積極的に関与・活動していく予定である。4.2節の若手科学者サミットへの参加、4.3節の学術雑誌への寄稿等がその活動に該当する。

4.2 若手科学者サミットへの参加

日本学術会議若手アカデミー若手科学者ネットワーク分科会が主催して、日本学術会議の講堂で
 ✓第2回若手科学者サミット, 2017年6月
 ✓第3回若手科学者サミット, 2018年6月
 が開催され、ビーム物理研究会・若手の会の幹事会から2名が2年連続して参加した。例年4月末に参加・発表申込が開始される。このサミットは、以下の3部で構成されている。

第1部 若手研究者による研究口頭発表

第2部 若手の会活動報告, ポスター発表

第3部 パネルディスカッション

参加者は、「人文・社会科学」、「生命科学」、「理学・工学」の全分野の若手科学者や若手の会代表者ら、若手アカデミーの方々、関係省庁である文部科学省や財務省の方々に、総勢60名程度であった。

第1部では、各若手の会からの推薦に基づいて選ばれた気鋭の若手科学者による研究口頭発表が行われた。異分野の科学者の口頭発表を拝聴したが、配布資料の読み合わせ方式など特色のある発表もあった。次回が開催された際には、ビーム物理研究会・若手の会からも口頭発表を推薦したいと考えている。第3回のサミットでは、「若手アカデミー賞」を設ける等、参加者・発表者を増やす取り組みも見られた。

第2部では、ビーム物理研究会・若手の会もポスター発表を行った。「ビーム物理」と説明されてもピンとくる方は少ないが、非常に多くの分野の学術研究に利用されているビームを支える基礎研究であると説明することで、放射光、レー

ザー、粒子ビームを実際に利用した方も多く、非常に共感を得やすかった。加えて、大型研究施設を抱える分野であるため、予算規模が大きいことも目を引く要因だったと言える。分野として非常に近い日本放射光学会若手部会の方とは、今後合同の若手研究会を実施したい等の具体的な話が出るなど、多くの方と親睦を深めることができた。一方、各若手の会の運用や活動状況に関しては、各々独立・自立した組織というより、関連する学協会に付随する組織が多いという印象が強かった。若手の負担が少ないという側面と、若手の自立性不足という側面が感じられたが、どちらの組織形態が良いとは言えない。

第3部では、第2回「若手科学者と研究費」、第3回「よい研究とは」というテーマでパネルディスカッションが行われ、主催者側の選定した若手には限らない科学者らと、省庁の方々もパネリストであった。会場からもネットを利用した意見投稿やマイクを使用した発言が認められていた。科学者側や省庁側等の各々の立場を反映した発言が多く、多様な考え方を聴くことができ、参考になったと言える。特に省庁側には科学者と共に良くしたいという考えと、科学者を管理したいという考えがあることなどである。一方、若手に特化した政策提言や指針のための議論はほぼなく、その点に関しては今後の改善を期待したい。

閉会后、発表者を対象とした懇親会が会場近くで行われた。より深い議論や交流が行われ、科学者間の「横」の繋がりだけでなく、省庁の方らとの「縦」の繋がりも深められ、非常に良い機会となっている。サミット後も縦横との交流が繋がっており、ビーム物理研究会・若手の会から今後も引き続き積極的に参加ならびに関与していく予定である。

4.3 学術雑誌「学術の動向」への寄稿

公益社団法人日本学術協力財団が出版する「学術の動向」の2017年12月号で特集(若手科学者の現在と課題:若手科学者サミット)が組まれた。その特集号で掲載された「若手科学者のネットワーク形成の現状について:井藤 彰⁴⁾」に「若手研究者の課題」を寄稿した。現在は購読無料のため、一度目を通していただければ幸いである。寄稿した若手の会は、我々を含む13の若手の会である。1会あたり500文字以内という制限の中

(超えている団体も多いが)、若手を取り巻く非常に厳しい環境とその要因、改善に向けた提案等を訴えた。他の寄稿文でも若手のキャリアパスに関する言及が多くみられる。この寄稿文が若手の課題を改善するような政策に直接結びつくとは考えにくい。しかしながら、実情を反映した意見を若手自身によって提言・発信し続けることが、学術研究の将来、ひいてはビーム物理研究会や日本加速器学会の将来を担う若手研究者や技術者の環境改善に繋がると信じている。

4.4 ビーム物理研究会・若手の会2017の開催と若手発表賞の設立

日本加速器学会誌の前号の会議報告⁵⁾で既に報告されているが、2017年11月16日から18日の3日間にかけて、愛知県岡崎市の自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンターにてビーム物理研究会・若手の会2017¹³⁾が開催された。主催は分子科学研究所極端紫外光研究施設(UVSOR)および名古屋大学シンクロトン光研究センターである。会期中の2日目の夕刻から若手の会懇親会、3日目は研究会としての若手の会を分子研の藤本将輝氏の協力の下、実施した。懇親会では、以前の若手の会の趣旨であった若手間の交流を目的とし、若手研究者や大学院生によって各研究施設や大学研究室紹介が行われ、親交を深めた。若手の会では口頭発表のみの若手セッションを設け、座長も全て若手を起用し、優秀な発表にはビーム物理研究会の会長名(羽島良一)による「若手発表賞」を授与することを明示した上で実施した。今回の趣旨は、

1. 若手研究者や大学院生に口頭発表の機会をより多くの与えること。
2. 若手という同じ目線で異なる研究に触れる機会を与えること。
3. 賞の設立により若手の研究意欲を高め、研究者・社会人としての自立と発展を支援すること。
4. 研究者・大学院生・学生の立場に関わらず同じ基準で審査されることで、自らの研究や発表を客観的に比較すること。

などとした。また、発表賞の審査項目として、「主体性」、「発表の纏まり」、「質疑応答」、「発表

時間」を定義し、7名の審査員による10段階評価で行った。主催の分子研が学生の旅費を補助してくださったこともあり、予想を超える20名の申込があり、発表時間15分として実施した。全ての発表がとてもよく纏まったものではあったが、今回は研究員2名、大学院生2名の計4名の方が受賞した⁵⁾。惜しくも受賞を逃した若手の方々も次回に向けて頑張るとの力強い言葉をいただいた。今回の取り組みで、親睦の深まり、大きな刺激、研究視野の広がりや研究意欲の高まりを提供できたとすれば幸いである。2.1節でも述べたが、2018年度はQSTの主催で開催される。若手の会は、QSTの水島康太氏と強く連携して行っていく。また、主催側で若手や学生への旅費の補助を予定して下さっており、ぜひ活用していただきたい。

5. まとめ(にかえて)

本稿では、ビーム物理研究会・若手の会の設立経緯や設立時の話題、組織・会員の状況、活動状況に関して報告した。まだ発足して間もない状況ではあるが、ここまで読んでいただいた方に少しでも興味を持ってもらえれば有難い。若手の会の目的は本稿にも記しているが、全体としての学生数の減少、博士号を取得する人数割合の減少、任期付き雇用の増加などの背景の下、若手間の情報共有や研究協力、さらには意見提言などを通じ、少しでも状況を打破しようという切実な想いを持つ若手が集まり発足した。そして、それに賛同していただいた方々に入会していただき、組織として成り立っている。現時点では、非常に多くの若手の会に対する熱意や好意的な言葉をいただいている。先日の新潟県長岡市における日本加速器学会年会時に著者2人で原稿に関する打ち合わせを行っていた際に、本稿を執筆する上で最も強調したいと合意したのが、若手の会の「次世代・次々世代の運営」を見据えていこうということであった。若手の会が力強く発展していき、ビーム物理・加速器分野・他の関連分野に貢献できるよう運営していくと共に、次世代に最高の形で引き継ぐことが責務であると考えている。

今回、日本加速器学会誌において話題として若手の会を紹介する機会をいただいた編集委員の皆様感謝するとともに、日本加速器学会における

¹³⁾ <http://www.nusr.nagoya-u.ac.jp/BeamPhysics2017/>

若手の団体に関する議論が円滑に, かつ発展的に進むことを期待している. 若手の会が力になれることがあれば, 協力させていただきたい. そして, 若手の会より2つのお願いをさせていただき, 本話題を閉じたいと思う. 1つ目は, 若手や学生の所属する研究室や研究機関を運営する皆様には, ビーム物理研究会・若手の会の若手の活動にご理解をいただき, 会に参加するための後押しや旅費等のサポートをいただきたい. 2つ目は, 企業を含む公募や採用を行う皆様には, 若手の会を活用し公募を広く周知していただきたい. これにより, 多くの公募が若手や学生の目に届くことで若手の活力源に繋がり, かつ採用側にも優秀な若手を採用できる等, 双方にとって良い場となると考えている.

最後になりますが, 若手の会の組織化の前身となる若手の会研究会を最初に開催まで漕ぎ着け,

その後も開催を続けてきた主要メンバーである柏木茂氏(東北大), 紀井俊輝氏(京大), 宮本篤氏(東芝)ならびにこれまでご協力いただいた全ての皆様に, 幹事会を代表して深く感謝申し上げます.

参考文献

- 1) 日本学術会議若手アカデミー若手科学者ネットワーク, URL: <http://www.scj.go.jp/ja/scj/wakate/wakatenet.html>.
- 2) “日本物理学会第72回年次大会インフォーマルミーティング(ビーム物理研究会総会)議事録”, 2017年3月, URL: <http://beam-physics.kek.jp/ryoiki/kenkyukai/memo.html>.
- 3) 日本学術会議若手アカデミー若手科学者ネットワーク分科会: “若手科学者ネットワークアニュアルレポート2016,” pp. 1-97, 2017年4月24日.
- 4) 井藤 彰: 学術の動向 **22**(12), 54 (2017).
- 5) 藤本将輝: 加速器 **15**, 73 (2018).